

## 昭和の東南海地震体験談

氏名:堀 昭七(ほり しょうしち)

生年月日:昭和 7 年 9 月 17 日

地震を体験した場所:那智勝浦町

当時の家族状況:祖母、父、母、兄(2人)、妹(5人)、  
叔母とその母親



### 1)地震発生時の状況

当時12歳(小学校6年生)で実家は鯉節製造業を営んでいた。

地震発生当日、周りの小学生は皆学校に行っていたが、家の芋堀がまだ終わっていなかったため、祖母、母、叔母2人と自分の5人は裏山の日和山の畑に出掛けていた。

父は家で仕事で忙しかった。妹は岸に上げた船にままごと遊びに出掛けていた。

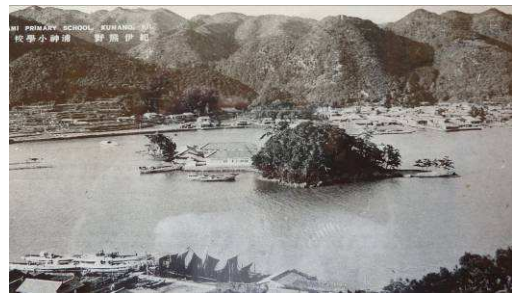
午後1時過ぎに突然地震があつて、だいぶ長い間地震は続いた。畑から家に戻ろうとすると、下から父親が「地震やどー、津波やどー、もう下りてくん」と叫んだ後、5分もしない間に「ゴォー」という音がした。地震が揺ってから、津波が来るまで15分以上あつたと思う。

### 2)津波発生時の状況

畑から浦神港の入り口にある立石の方を見たら、湾一杯に広がった真一文字の真っ白い泡になった潮がぐんぐんとまくりながら向かってきた。立石は隠れて見えなくなり、湾の入り口の両側の磯が浸かってしまったように見えた。

それは目で追うくらいの速さだった。津波は浦神湾の岩屋崎の入り口まで来たら、西側と東側に潮が分かれ、真ん中の潮は小学校まで向かってきた。

当時の小学校は平屋で、軒先のとゆが見えないほど潮で埋まった。さらに波はその先の鍋島の松ノ木の上のほうが見えないくらい島の半分以上が浸かるほどの高さだった。



[昭和 20 年頃の浦神湾の様子]

青年団の人たちが「津波やどー」と小学校に言いに来てくれて、全校生徒の1/3くらいがすぐそばの弁天島に駆け上がったと思われる。おもに5~6年生だけがすぐに高い所に避難して行った。

その後、波はまたたくまに引き始め、学校の前の小さな島や湾全体がごっそり見えるくらい引いて行った。

東側の端に造船所があり、肋骨だけ組んだ船が2隻共くつ付いたまま、湾の奥まで流され、

鍋島の周りを回っている打ちに第2波が来た。第2波は第1波ほどの高さはなかった。

2波、3波が来たり引いたりしている間にゴミが行ったり来たりしていた。

地震が揺ったら津波だという感覚がなく、地震が大きかったと言っている間に津波が来たので、家財道具を持ち出した家はなかったと思う。

山の上から自分の家が流されていくのを泣きながら見た。

(当一節のみ当時小学校4年生だった堀さんの奥様のお話)

### 3) 家族の行動・被害

畑にいた5人は無事だったが、妹たちを探しに行った父が、船に乗ったまま津波で流されそうになった妹たちを腰まで海に入って間一髪で助け出した。

そのあと、その船は津波に持って行かれた。もう少し父の発見が遅れていたら、妹たちは流されていたかもしれない。

家にはいっとう缶に非常米と言って、米を保管してあったが、その缶の上部ぎりぎりまで浸っただけで、水は入らず、その晩、その米を炊いて食べた。

畳から一斗缶の高さまで浸り、家の周りがゴミで一杯だったので、土地の人たちだけで協力し合って片付けるのに1ヶ月程かかった。その間、線路から山側で高台のある伯父の家で一ヶ月程やっかいになった。

### 4) 集落・周囲の被害

小学校の道の前に小学校6年生の身長で顔が隠れる程の塀があり、第1波が引くときにガサッと倒れた。当時小学校まで石垣で作った1本の道があり、両側は海だった。

第2波が引いて行くときに気がついたら、その道が、現在の町立浦神保育所あたりから1/3 くらい崩れてなくなってしまった。実際は第1波が引くときに崩れてしまったのかもしれない。第1波が来て、水かさが上がってきたときには、湾はずでにゴミで一杯だった。

当時は現在のようにエンジンの付いた船はなく、艀の付いた特に細長いえび網漁に使う船で、当地では“さっぱ”と呼ばれていた。

東側の漁師が持っていた“さっぱ”は全部流され、湾内で2～3隻の船に乗ったまま、あっちやり、こっちやりしていた漁師もいた。

当時使われていたのは船が流れて行かないほどの強度の貧弱なロープで、簡単に切れたと思われる。

一人だけ津波に流された子がいたが、当時石原産業という会社が国道42号線沿いに鉾石を積み出す棧橋をもっていて、運よくその端に引っかかって助かった。

逃げる途中で膝から腰まで潮に浸かった子もいたが、皆逃げ切ることができた。

少し目の不自由な年寄り一人だけが家から逃げることが出来ず、死亡した。

浦神駅の前のあたりの10軒あまりの民家が津波で流された。青年クラブの前の家は、家は残ったものの、中味は全部持って行かれた。駅の辺りがいちばん被害が大きく、潮は鴨居

まで来ていた。海岸に近い家はほとんど半分以上ふすままで浸かり、屋根まで浸かった家もあった。流された納屋は何軒もあった。

波の具合で、東側より西側のほうが被害が大きかった。西側の湾のあたりは、ゴミや流木で一杯だった。東側でも小学校の前あたりの、海を挟んで向かい側の一軒の家が流されが、ほとんどの家が浸水だけで済んだ。

#### 5)地震・津波後の生活

家が流された人たちは、海蔵寺で25日間くらい避難生活を送った。

(以下、当時小学校4年生だった堀さんの奥様のお話)

どこから配給されたかはわからないが、衣類などの救援物資が届き、自分に合う服を貰ってきた。食糧は消防団の人たちがあちこちから米を集めてきてくれて、外で炊き出ししてくれて、おにぎりにして頂いた。

寺での避難生活が長くなると、大広間を仕切りで区切って、その中で家族と過ごした。

お寺から出た後、祖母の家を先に修復して、そこで家族みんなが生活した。

大工さんもなかなか順番が回ってこず、6ヶ月以上経ってから、やっと大工さんを回してもらい、何とか板張りにしてもらい、そこで莫蔭を敷いて暮らした。津波があったのは12月だったが、夏になってようやく引越しすることが出来た。

小学校の前の道が潰れてしまったため、引き潮のときは歩いて通うことが出来たが、それ以外は渡し舟で学校まで通った。当時子供だったので、親は大変な苦勞をしたと思う。

昼間だったから死者は少なかったが、津波が線路まで来るくらいだから、夜だったら波にさらわれていると思う。

海岸縁に流されたゴミは大変な量だった。湾内のゴミのほとんどは自然と流れて行ったと思われる。高い場所に流されてきて、潮が引いて行って取り残されたゴミもかなりあったが、そういうゴミは自分たちで片付けた。

#### 6)次の災害への備え

浦神地区には特定避難場所は特に設定されていない。

避難後の二次避難場所は海蔵寺と東側の集会所だが、一時避難所はとにかく近くて高い所に逃げることになっている。

避難場所に行くまで遠い人はその途中で津波にさらわれる危険性もあり、西側の東側の裏がすぐ山なので、高い所に駆け上がった方が、安全である。

毎年、避難訓練は行っているが、その避難訓練でも高い所に逃げるよう指導している。

海蔵寺は海拔5m20cmだが、先日の避難訓練で5mの波が来たら、もっと高いところに逃げるよう区長より通達されている。

## 7)その他

1946年の南海地震の記憶は、朝4時頃だったか、家のちょっと前に石垣に覆われた浦神家があり、その石垣の高さと同じところに家業の加工場があって、そこに牛を一頭飼っていた。

その牛が波で浮かされて牛舎の窓から首だけ出して助かったことから、潮は2mは来ていたと思われる。第1波が来て、引いていき、2波、3波は小さいものだったので家が浸かったか外に置いていた物が流されたくらいだった。

津波ってどうだと聞かれたら、とにかく波が速いということである。地震の後、何分後に来るかはわからないが、東南海地震の時は今思うと15～20分の間に来たと思われる。